「あさぢが露」補遺

大槻修

従来、散佚物語として、その存在を諦められていた物語「あさぢが露」は、幸運にも昭和二十七年秋、同じ境遇にあった物語「在明の別」ともども、西荘文庫から天理図書館に入り、漸くその伝存が確認せられた。昭和二十八年十月、木村三四吾氏校訂になる活字複刻版（古典文庫）が刊行され、続いて昭和三十六年十一月、小木喬氏の詳細な研究[1]が公けになり、また昭和四十三年四月、鈴木弘道氏の論考[2]も発表されて、次第に研究の便が図られるに至った。

近くは昭和四十七年一月、天理図書館善本叢書の第六巻として、中村忠行氏解題のもとに原本影印版が刊行され、かくいう筆者も、昭和四十九年六月、「あさぢが露の研究」を、同五十年四月、その改訂版である「あさぢが露」を公刊した。現在のところ、安永悦子、加藤茂氏による好論文[3]も加えて、この物語の考察は、徐々に顕著な進展をみせてはいるが、ただ文字通り天下の孤本である上、誤字、脱行かと覚しき個所や、汚損による判読、加えて巻末の散佚など、その前途には、なお幾多の悪条件が横たわっている。

筆者は、昭和四十四年十月、「在明の別の研究」刊行以後、古典文庫本「あさぢか露」の誤植、誤読を訂した上、頭注、補注、研究論文などを加えた「あさぢが露の研究」を上梓したが、なお不備なるを免れず、松田健一氏の助力を仰ぎ、その改訂版を著して是正するところがあった。ただ改訂版という性格上、また別途に正誤表を公表する機会を逸したまま今日に至ったため、以後の補正をも含めて、いわゆる失考、誤植など、いまだに残存せしめた感があり、改めてここに「あさぢが露」補遺と題して、両著にわたる整備・調整をしておきたい。今後、諸家による一層の検討が加えられ、次第に補正され、補強されゆくことを冀うものである。

なお煩雑を避けるため、拙著「あさぢが露の研究」は「研究」と、また同じく改訂版「あさぢが露」は「改訂版」と略記する。また加藤氏の考察は「『浅茅が露』の本文整定について」（平安文学研

究、第五十四帖）に依る。

一

ひめみやのをはしますをりは御せんにもまいり給はずなるを

（p29・3、7オ）

以下、引用本文は「研究」表記（但し、一部を改訂してある）に従い、（　）内は「研究」の頁と行および天理本の丁数を示す。

成長するに従って、姫宮を意識し始めた二位中将（風葉和歌集にいう入道関白）が、やがて恋に身を苦しめ、両親に胸中を訴える場面である。古典文庫本は、「御せつ」とするが意が定かでなく、「研究」では「御」を「津」の誤写として、仮りに「つとへ」と考えたがやはり落ち着かない。原本「御」「ん」の字体にやや不審の念を残すが、一応「御せん」すなわち「御前」の意に解しておく。姫宮を異性として意識し始めた彼が、幼馴染みではありながら、その「御前」に参上し難くなった訳である。「改訂版」も併せて改めておく。

二

二ゐの中将もをなし御よはひのほとにやなり給けんよの人月日のひかりと思ひきこえたり

（p33・3、10ウ）

二位中将の年齢は、原本すでに「十五六なとにやをはすらん」（p32・4、9ウ）とあり、重複するところから、「研究」「改訂版」とも「三位」と改めた。が、後文「三ゐきみは……いまた十五六のほとに」（p34・1、11オ）とあり首尾一貫しない。いま仮りに原本表記に戻して「二ゐ」と改め、前文「十五六なとにやをはすらん」は、春宮の女御麗景殿（右大臣の娘）の、現在の年齢とする。

右大臣は、北の方との間に彼女を設けたあと、間もなく帥の宮の姫君に通って三位中将を生ませたのであろうか。一方、関白の子二位中将も、ほぼ同じ時期の誕生と覚しく、年齢差の面白味はないが、三人おしなべて「十五、六」と考えておきたい。

三

よへはまちやしけんとたになき御文はかりは中〳〵もよをしのつまとなりつゝはて〳〵は心もあしう

（p41・13、15オ）

間遠に通う二位中将の真情を疑い、心労重なった先坊の姫宮が病いに臥す場面である。古典文庫本は「きゝもよせし」と翻刻し、「研究」では「未詳。「きゝもよせじのつまとなり」と、何かことわざの類あるか。もっとも原本における「きゝ」の書体が異様である。或いは、「きゝ」は「中〳〵」の変型か。また「もよせし」のあたり誤写あるか」と注した。確かに「中〳〵」の書体は誤読し易く、筆癖もあるが、引用本文の通り、「中〳〵もよをしのつまとなりつゝ」と読解する方が、解釈の点からもスムーズであり、「改訂版」で訂した。

四

かひなしと思ひなからもうらかせにふけぬやたえぬをきつしらなみ　（p46・9、17オ）

二位中将の歌―「うらもなくたのむみきはゝかいなくてきみは心をゝきつしらなみ」（p46・4、17オ）に対する、先坊の姫宮の返しに相当する。「浦（裏）」「沖（置き）」「汀」「貝（甲斐）」「沖つ白波」と、巧みに対応した贈答歌である。古典文庫本は「かちなしと」と翻刻し、「研究」「改訂版」ともそれに倣ったが、なお疑念を残していた。

実は、原本の筆癖から、「ち」「ひ」「い」の間に誤読を誘い易い面があり、たとえば「ひさしのまにひをけにむかひて」（p48・9、18オ）に出る三個所の「ひ」など、一見「ち」に見紛う筆致であり（もっとも解釈上は、容易に読解できるが―）、特に「ひたけて御ひんなとひきつくろひて」（p77・1、32ウ）および「御ひんひきつくろいいてたち給ふほとに」（p140・4、57ウ）は誤読し易く、古典文庫本は、ともに「御ちん」と読んでいる。かかる誤読の責任は、或いは天理本の親本に帰すべきか、「ひらかとなとはたてなからいかきとかいふものゝしるしもけさやかに」（p133・5、55オ）の「いかき」も、「ひかき（桧垣）」の誤写であろう。

室町末期から桃山時代の書写と覚しき吉田忠氏蔵「こわたの時雨」を翻刻するに際して、同じく「ち」「ひ」「い」の間に、判読を強いられる個所多く、改めて天理本「あさぢが露」の筆癖を思い、また二位中将と先坊の姫宮との贈答歌の場合は、やはり「かいなくて」に対する「かひなしと」であろうと考えた。「ひかき」と併せ訂する意向のところ、ともに加藤氏から、結論を同じうする見解が示され、いささか意を強うした次第である。ここに「かひなしと」「ひかき」と、「研究」「改訂版」を訂しておきたい。

五

りつしはいてぬとおほすほとに思ひのほかにほのめきよるけしき
まつ人にまかうへきかは　（p49・13・18ウ）

初め、「研究」では「まづ人にまがふべきかは。」として、「人」を律師と考えたが、この場面は、歎き沈む先坊の姫宮の傍に、「思ひのほかに」律師がほのめきよるところ、すなわち、「待つ人（中将）」にまがうべくもなく、律師であった、と解すべきであり、改めて「改訂版」に、「待つ人にまがふべきかは。」と訂した。なお、その前文、律師が数珠押し磨りながら、姫宮の部屋にしのび入るシーンに

そうもさらにことてなもひやうとうたいゐとすゝをしすりて　（p49・3、18オ）

なる表記がある。「研究」「改訂版」とも、「南無平等大慧」の頭注に、狭衣物語、巻二から「南無平等大会法華経と忍びやかにの給へるも」（古典大系本 p114）を引用しながら、「ことて」不詳としたことは不覚であった。すなわち、同じ狭衣物語、巻二に「うち休まんとも思されねば、やがて、作礼而去まで通しはて給に」（古典大系本、p210）とあり、「作礼而去」は、当然ながら法華経、巻二十八、普賢菩薩勧発品の巻末の句に該当する。ただ原文は「さらにこ」とあるが、多分「い」の無表記か、伝写の途中の脱字であろう。幸い加藤氏の指摘があり（同氏「浅茅が露の作者についての試案―続岡詞林、第二号）、ここに訂しておく。

六

かつはたれゆへにたへいるいのちなるらんとおほし入たりしつみふかにも　（p56・13、22オ）

先坊の姫宮の死を、わが身の所業ゆえに、と悔む二位中将が、手厚く、姫の菩提を弔う条である。古典文庫本「たくへる」と翻刻し、「研究」もそれに倣ったが、やはり落ち着かない。重ねて原本を検討するに、該当個所は、誤写した文字の上に、筆太に重ね書きをしており、一見誤読し易い。ここは解釈上からも「たへいる」、すなわち「絶え入る命」と考えられ、原本も、訂正してそのように記している。従って「改訂版」も、引用本文のように訂した。なお中村忠行氏も指摘されるように、[4] 原本の西行筆とされる部分の誤写訂正法に、誤写の上に筆太く重ね書きしたり、乱暴な塗抹の上、傍書する例が多い。

七

火をけのかたはらによりてをりひつなとをとりよせて

（p63・2、25ウ）

古典文庫本「火を堂のかたはらによりて」とする。語法的にも不審で、「研究」では、「火を堂の傍に寄せて」と整定したが、なお「堂」の意味が通じない。改めて原本をみるに、「堂」は「気」のくずしを誤読したもので、「改訂版」に訂したように、「火桶の傍に寄りて」とすべきものである。

八

かれみたてまつらせ給へこのきみ二所これをつねになんすきさせ給みたてまつれは思ふ事もわすれ侍なり　（p117・8、50オ）

西の京の隠れ家、その垣根越しに、中納言（風葉集にいう入道関白）たちが通り過ぎるのを、女君（風葉集にいう尚侍）が涙ながらに見送る場面である。古典文庫本「をきさせ給みたてまつれは」と記し、「研究」「改訂版」もそれに倣って、「起きさせ給ひ、み奉れば」と整定したが、なお文脈がスムーズではない。いま女君は病いの床に臥せる身ではなく、また主の女が、中納言たち二人を指して、「これをつねになん起きさせ給ひ、み奉れば」と、女君に語るのも変である。

原本の「をきさせ」の「を」は、通例の字体と異なり、或いは「す」と読み得る傾向にあり、ならば「これ」は女君たちの住む西の京の賤が伏せ屋を指し、「この君二所、これをつねになん過ぎさせ給ふ、み奉れば」と読みくだすことになる。解釈の上からも無理がなく、一応ここに改めておく。また後文

御くるまのうちもひかるやうにてなとの程にてふねのうちなみのうゑとすんしてすき給ぬるは　（p117・10、50オ）

とあるが、「研究」「改訂版」とも「御車の内も光るやうにて、『などの程にて、舟の内、波の上』と誦じてすぎ給ひぬるは」とあるが、これでは誦じ難かろう。原本は「ひかるやうにて」と連綿しているが、中納言たちの乗った車が、女君の居る場所から非常に近い意を含めて、

御車の内も光るやうに、手などの程にて

と考えるべきか。ただ、かかる用例を十二分に検索しなくてはならない。なお、加藤氏は

御車のうちも光るやうに、手など入（る）程にて

とされるが「の」と「入」との字体に、なお不安が残る。いま暫く考えたい。

九

こゝもとのつまとをかいはなちて人くれはみつけられしとのきち

かきたちはなのしたにかくれ給ぬれはこの人みうしないてれいのいけやまのあたりにまつ侍らんするなめりとて入ぬるに

（p126・6、53オ）

「研究」では、「人くれはみつけられし」を、中納言の心中と考えて「　」に入れたため、頭注（二六）で、「以下『人来れば見つけられし―』への、つながりが不自然である。脱文あるか」と疑ったが、「人くれば」は地の文であり、「みつけられし」と、中納言が軒近い橘の下に隠れる訳であった。だから、「この人みうしないて」が、やはり地の文で、「れいの―」から「　」にくくるべきであった。このあたり、見つけられまいとする中納言の様子と、探す人との模様をうつして面白い。「改訂版」では正したが、念のため記しておく。

十

いそきかへり給ぬ少将はよしなきことをも申侍かなとてことのありさまをはりのかみにかたれは

（p138・3、56ウ）

少将の先導で忍び込んだ先が、大変な醜女の住み家なるに驚いた中納言が、供の尾張守を代理に置いて、逃げ帰るという、一つの挿話として、微苦笑を誘う場面である（「研究」p248、補注二（一四三頁）参照）。古典文庫本は「少将は」の個所を「われは」とする。「研究」「改訂版」とも、それに倣ったが、なお原本を検討するに、

少将とそそんわうのしそくなれともさやうのなかにたちましりぬれは

（p123・5、52オ）

の「少将」と、字体が類似している。（なお「そんわうのしそく」を古典文庫本は「そんわうのしうく」と翻刻しているが、「研究」で、「そんわうのしそく」と訂したものの「子息」と漢字をあてたのは誤りで、「改訂版」に「親族」と直した。前文「そのしそくなとやをはすらん」（p121・12、51ウ）も同じ）。

思うに、あまりの醜女ぶりに驚いた中納言が、御供の尾張守を呼んで身代りを命じ、急ぎ脱出のあと、少将が「よしなきことをも申侍かな」と、事の仔細を尾張守に語った、とすれば、解釈の上からもスムーズで、一応「少将は」を地の文と考え、「よしなきことをも申侍かな」を、尾張守に対する少将の言葉としておく。なお後文、醜女に対する尾張守の返歌

きへぬともくれはをきなんしらつゆのかゝるためしそよにたくひなき

（p139・5、57オ）

の「をきなん」は、「研究」「改訂版」とも「起きなん」と誤字が入っているが、加藤氏の指摘をまつまでもなく、「白露」の縁語として「置きなん」である。さらに後文「よいのそう」（p139・7、57

オ）も、当然ながら「夜居の僧」と考えるべきである。

十一

このちこのかほのいひしらすはな〳〵とうつくしきかほりたるほといとよく思ひよそへられたるはかくなりけりいかなるくまにかゝるかたみをとゝめをきてしらすかほにてさすらへ給らんといひいてゝけしきもきかまほしくおほせとも　（P160・7、64オ）

かつて西の京にて陣痛に苦しむ女（実は風葉集にいう尚侍。中納言の恋人）を世話した三位中将は、縁あって、その乳児を引き取ることになる。添えられた形見の品を開いたところ、中納言愛用の笛が出てきて、「さては中納言との間の子であったか、」と驚き、いかなる事情が秘められてきたのかと、三位中将が思案する場面である。

「研究」「改訂版」とも、「かくなりけり」から「さすらへ給らん」を三位中将の心中思惟と考え（「　」は『　』の誤り）、「けしきもきかまほしくおほせども」にかかると理解した。（もっとも加藤氏の論にいう「と、いひいてゝけしきもきかまほしくおほせとも」と読点をつける方が、「おほせとも」との連携を明白にし得る。ここに訂しておきたい）

結局、三位中将の心中は、一管の笛を見て始めて、過去の一切を今まで全然知らなかったが、「かくなりけり」（成程、中納言の子であったのだなあ）と、改めて驚く。その生々しい感情の吐露を扱み取りたい意図から、「かくなりけり……給らん」とした訳である。当然ながら「いとよく思ひよそへられたるは」は、形見の笛を見出した三位中将が、そのもとの所有者たる中納言こそ、この乳児の父であったのか……と（加えて、あの陣痛で苦しんでいた女が、中納言の愛人であったのか……と）、強く胸をうたれた感情を示した個所であり、「思ひよそへられたるは」の、末尾「は」は、感嘆の意を表わす。

もっとも、加藤氏の説かれるように、「このちこのかほの」から「さすらへ給らん」までを三位中将の思惟と考えることもできる。ただ、狭衣物語における扇にも似て、本物語における一管の「笛」が、実に有効な働きをしており、引用本文の部分は、そのヤマ場と解すべく、より感情の盛りあがる味読をしたい訳である。

なお、後文「わか物にしてやおほしたてまし」（P160・12、64オ）は、「研究」「改訂版」とも誤りで、「生し立てまし」と訂されるべきである。（ついでながら、「いよ〳〵このきみをあはれにかなしきことにおほしたて給に」（P32・12、10オ）も同じく訂正しておく）また、加藤氏の鑑賞本文をみるに、「契り深くて」から「生し立て

まし」までを「　」にくくり、「いまは起き返（り）などして」からを地の文とするが、落ち着かないように思う。

十二

ひめ君は蔵人のおとゝのしきふの大夫かめのちあへ侍りしかつきたてまつりたりしに　（p177・4、71ウ）

高野の尼と東国の女との会話から、事の仔細が次第に明白にされゆく場面である。「研究」「改訂版」とも、「古典文庫本「のちあへ」とする。原本「あ」の個所に修正加筆の跡がある。「そ」と改める」と注して、「のちぞへ」と改めたが、これは賢しらであった。幸い、加藤氏によって、詳細な検討が加えられ、枕草子、浜松中納言物語の用例から、「乳あゆ」とされ、「乳あえ」に整定された。加藤氏の解を示しておく。

姫君（＝尚侍）（に）は、蔵人の弟の式部大夫の妻で、お乳の出ました人が、（彼女に）おつき申し上げていた（のです）が、

十三

ひと時も□□□たてまつらすたえにめてたき事のみあらはし給　（p198・11、81オ）

古典文庫本「たてまつらすたにめてたき事」とあり、「研究」もそれに同じいが、重ねて原本を見るに、「た」と「に」との間に「え」が記されているように思われる。一応「改訂版」では「え」を補ない、「尋らず。妙にめでたいこと」と訂した。なお□□□の部分、やはり剥脱にて不明。古典文庫本と同じく、いまは空白にしておく。

十四

なにかしか身にいとあたはぬ事に侍とむさうに見る事侍りしにより　（p200・11、82ウ）

「研究」「改訂版」とも、「いとあたはぬことに侍ると、夢相に」としたが、前後の意味が通じない。「夢相」は「夢想」の誤植として、ここは加藤氏の指摘通り、「いとあたはぬことに侍れど」とすべきであろう。ただ前文「このへんに侍るときくなんいとあやし」（p200・9、82オ）について、加藤氏は、係り結びの故に、「あやし（き）」と補って連体形とされる（なお別の二個所、5オ・ウ、80ウについても同じ意向の由、詳しくは同氏論考の註35参照）が、いま暫く考えたい。

たとえば、夜の寝覚に「今のたちまのかみときあきらの朝臣のむすめなんわたりてすみ さふらふなり」（巻一、なお前田家本、島原文庫本とも「なり」）をはじめ、割合に係り結びがくずれている傾向を見出す。もちろん天理本書写者の、不用意な脱字とも考えられるが、いわゆる活用語尾の字を挿入するのではなく、「なん」に対する結びのための「き」挿入は、いま暫く控えておきたい。

また、加藤氏は、前文「月ころあやしく」（p200・10、82オ）から、北山の聖の会話が始まる、と考えられる。ならば「いかにし侍げるやらん」は、その前の三位中将の言葉に吸収されることになるのであろう。ただ、「いかにし侍けるやらん」の主語は、当然ながら「たつねまほしき人のゆくゑもしらすまとはしてし」尚侍である、としても、その女君（尚侍）を、「月ころあやしく、たつねたてまつる人も侯はて」北山の聖が困惑している、と理解されよう。つまり「いかにし侍けるやらん」から北山の聖の言葉としても十分通じると思う。「研究」「改訂版」の頭注三三「このあたり脱文あるか。「思ひかけぬことなれど」から、三位中将の言葉と覚しいが、「なにがしが身に」以降、北山の聖の話になっている」は、「いとあたはぬことに侍れど、夢想に」と整定されたいま、全文を抹消する。また「いつくをはかりにてか」（p201・3、82ウ）「いつくをはかりにて」（p201・7、82ウ）に、ともども「ば」が入っているのは誤植であり、訂しておく。

以上、十四項目にわたって検討を加え、誤植をも含めて補正したが、そのほか、「研究」から「改訂版」への過程で訂したものおよび未調整の分を、正誤表を兼ねて、ここに列記する。A表〔本文〕の頁・行数、B表〔頭注〕の頁・番号・行、段数は、すべて「研究」のそれに依り、A表〔本文〕の丁数は原本のそれを示す。

A表〔本文〕

頁	行	丁	誤り	訂正
23	1	3オ	御琴たび	御琴たび
24	6	4ウ	くのみなり侍るを	くのみなり侍るを
32	6	9ウ	春宮の	帥の宮の（7行目ニ移ル）
	10	10オ	生したて給ひし	生したて給ひし
53	8	20ウ	修法してけるを	修法して侯ふを
60	1	23ウ	参らせ給へけれども	参らせ給ふべけれども
2			申しし時	申しし時
68	2	28ウ	いひあはず。	いひあはす。
72	11	30オ	誘ひいたらで	誘ひいだして
87	5	37ウ	いだき参らせ	いそぎ参らせ

151	142	138	134	133	132	128	123	121	116	115	114	111		110	109	108		102
1	7	2	3	3	13	3	6	13	3	3	13	1		10	5	3		7
61オ	58ウ	56ウ		55オ	54ウ	53ウ	52オ	51オ		49オ	48ウ			47オ	46ウ	45ウ		44オ
かたくあやしく	かくたがへれ聞えて、	許し給はんがなに	少将ききて	生侍	思ひ申したれ	湯	子息	その子息などや	あしきことに、	やうなるにもや	申し出で給ひて	行方も	しくと申す。	人つかはし侍るを」と、	すてられぬらん	案内	るに、「人の	人人いでさせ給ひなんず
かたがたあやしく	かくたがへられ聞えて、	許し給はんかはりに	少将ききて	生侍	思ひ申したれ」	内	親族	その親族などや	あしきことは、	やうなる事もや	うけ給はりて	行方も	一と申す。	人つかはし侍る音し侯ふ	さそはれぬらん	遊び	ずるに、人の	人人「いでさせ給ひなん

B表（頭注）

頁	番号	行	段	誤り	訂正
21	10	2	1	第十三節を	第十四節を
24	19	3	1	空」	道」
26	29	4	1	（新古続	（新続古

208		201	199	193		190		185	184	179	173	157							
8	7	4	5	2		11	11	2	3	4	3	2							
86ウ		82ウ	81ウ	78ウ		77ウ	75オ	74ウ	74オ	72ウ	69オ	63オ							
の迷ふにて、	いづくをばかりにて	いづくをばかりにてか	御先師には	あるを	をよばで	おはすらんとだに承る	七八年の姉	かづきたり。	やうやく	いなかびたる	耐へぬ思ひ、	御乳母子は、「こは							
の不用にて、	いづくをはかりにて	いづくをはかりにてか	御前所は（ナオ存疑）	ありと	及ばで	おはすらんとだに承り	七八年が姉	侯ひつきたり。	高野へ	いなかびたる	絶えぬ思ひ、	御乳母、「こは							

29	33	33	21	14	9	10	18	15〜2	31	41	38	37	37	36	33	49
4	19															
1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1
全文抹消（ナオ改訂版ノ注モ改メル）	全文抹消（ナオ改訂版ノ注モ改メル）	御ゟま	くろつきの森	のく無縁であり、	たであって、	君子所常御不離於身	全文抹消。	「ことて」不詳ヲ抹消
古典文庫本「御せつにも」原本「御」「ん」の字体にやや不審あるが、一応「御せん」つまり「御前」の意に解しておく。	文脈やや無理あるが「十五、六などにやおはらん」（9ウ）を、麗景殿の齢とし、以下二位、三位ともども「十五、六のほど」とする	御さま	くつろきの森	たく無縁であり、	のであって、	与八音並行然君子所常御者琴最親密不離於身	原文「中〳〵もよをしの」と読める。もっとも原本における「中〳〵」の書体が誤読し易い。古典文庫本は「きゝもよせしの」とする。いま仮りに改める。（改訂版ニョル）	「さらにこ」は「作礼而去」。法華経巻二十八の末の句に当たる。なお

77	110	123		126		177		202
28	21	11	12	26	37	33
1	1	11	8	1	7	
1	1	1	8	1	1	1
の「しのびあへすやこゑ	全文抹消。	て」（一三四頁）「少将追ひつきて、参りて、さていかに、と笑ひ奉れば」（一三六頁）	の誤写か。仮りに「孫王の子息」とする。	全文抹消	のずらあんものは姫君の宮仕心を仕うまつれなど、ただこへ御事よりほかにいひおかの、	全文抹消（改訂版ノ注モ改メル）
「い」の無表記か。の「しのひあへすやこゑ	p111ノ注（二二）ヲ（二一）ニ変更。	て」（一三四頁）もっとも原本「われこそ」とも読める。ならば、一二九頁が初出。	の誤写か。仮りに「孫王の親族」とする。	このあたり、見つけられまいとあわてる中納言の様子と、探す人との模様をうつして面白い。	の心あらんものは、姫君の宮仕へを仕うまつれなど、ただこの御事よりほかにいひおかず	或いは「月頃あやしく」から北山の聖の言葉か

なお本稿によって、「研究」「改訂版」ともに、「本文整定考」の各項目に、かなりの変動をきたす。大半は「改訂版」に是正されているが、残余の分は、事の煩雅を避けるため、「新訂版」の折に譲り

たい。筆を擱くに当たり、松田健一氏の労に負うところ多く、また加藤茂氏の御教示を多としたい。併記して御礼申し上げる。

（昭和五一・一・二九）

注（1）小木喬氏「鎌倉時代物語の研究」（昭和36・11、東宝書房）

（2）鈴木弘道氏「平安末期物語論」（同43・4、塙書房）

（3）安永悦子氏「あさぢが露の独自性について」（平安文学研究、第二十一輯）

加藤茂氏「浅茅が露の本文整定について」（平安文学研究、第五十四輯）同氏「浅茅が露の作者についての試案」（緑岡詞林、第二号）

（4）天理図書館善本叢書、第六巻「あさぢが露・在明の別」所収の中村忠行氏解題。